

大阪狭山市文化財報告書32

**大阪狭山市内遺跡群
発掘調査概要報告書 15**



平成17年(2005年)3月

大阪狭山市教育委員会

序 文

大阪狭山市内には大阪府の史跡名勝に指定されております狭山池をはじめとして、数多くの文化財があります。狭山池では治水ダム化工事に伴う発掘調査によって多くの遺構、遺物が出土し、東柵・中柵等が大阪府の指定文化財となりました。平成13年3月にオープンした大阪府立狭山池博物館では、この発掘調査の成果を中心とした展示が行われ、多くの方々にご観覧いただいております。

本市教育委員会では、平成2年度より個人住宅などの建築に伴う発掘調査を継続的に実施してまいりました。本年度は狭山藩陣屋、半田遺跡などの埋蔵文化財包蔵地で発掘調査を実施し、貴重な成果を得ることができました。本報告書はこれらの調査成果をまとめたものです。本報告書が地域の歴史を考えるうえでの一助となれば幸いです。

調査にあたりましては、建設主の皆様ならびに近隣の皆様に多大なご協力を賜り厚く感謝いたします。

今後とも本市文化財保護行政に対するご理解とご支援のほどを、よろしくお願ひ申し上げます。

平成17年（2005年）3月

大阪狭山市教育委員会
教育長 岡 本 修 一

例　　言

1. 本書は国庫の補助を受け、大阪狭山市教育委員会が平成16年度事業として大阪狭山市内で実施した個人住宅建築等に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査の結果をまとめた概要報告書である。
2. 本書に収録した調査は以下の通りである。
 - 1・狭山藩陣屋跡 04-1区、04-2区、04-3区、04-4区
 - 2・半田遺跡 04-1区
3. 発掘調査は大阪狭山市教育委員会社会教育課市川秀之が担当した。現地調査においては島山文夫・米澤孝成・古西健治ら各氏の協力を得た。
4. 内業調査については市川秀之が担当し、若宮美佐・橋本和美・笠岡裕里子・扶川陽子ら各氏のご協力を得た。遺物の撮影は有限会社阿南写真工房に依頼した。
5. 本書の執筆・編集は市川秀之が担当した。

本文目次

(頁)

序文 大阪狭山市教育長 岡本修一

例言

はじめに	1
1・狭山藩陣屋跡	4
04-1区	4
04-2区	7
04-3区	9
04-4区	10
2・半田遺跡	15
04-1区	15
3・まとめ	17
報告書抄録	17

はじめに

大阪狭山市内では1960年代以降に急速な人口増加が生じ、南部の丘陵地に狭山ニュータウンが建設されるなど住宅開発が進んだ。1980年代以降はひとつの勢いは衰えたものの、現在でも小規模な開発は盛んに進められている。また近年では1960年代～70年代に新築された住宅の建て替えが行われており、これらに伴って発掘届提出数や発掘件数は微増の傾向にある。ここにこ数年は狭山池周辺の整備やさやま遊園跡地の住宅開発が進められ、その周辺でも住居の移転や建て替えが頻繁に行われるなど、狭山藩陣屋跡における開発が多く、発掘調査についてもこの地域が中心となっている。

大阪狭山市内の遺跡分布および地形分類は図1のとおりである。大阪狭山市は西側の泉州北丘陵と東側の羽曳野丘陵にはさまれた場所に所在しているが、この二つの丘陵の間に何本かの南北方向の谷筋が走っている。これらの谷筋からは旧石器時代・縄文時代の打製石器が発見されているが、当該時期の明確な遺構を伴う遺跡は確認されていない。

弥生時代の遺跡としては市域南部の高地において弥生時代後期の高地性集落が確認された茶薬莢遺跡が知られているのみである。

古墳時代以降の本市域内における人々の活動の痕跡は、近年の発掘調査成果によって徐々に明らかになってきている。旧天野川流域の沖積低地に立地する池尻遺跡では、土壙・焼土壙など住居跡の可能性のある遺構とともに庄内式の甕・壺と布留式の甕が出土している。旧天野川右岸の中位段丘面に立地する狭山藩陣屋跡では自然の谷地形の底からTK47型式の須恵器が出土しており、古墳時代中期の集落が段丘面に存在した可能性が高い。また天野川右岸の沖積低地にある狭山神社遺跡でも布留式の甕が出土している。今後沖積低地に存在する遺跡の調査が進むとさらにこの時期の生活が明らかになっていくことが期待される。

古墳時代中期以降、泉州北丘陵を中心とした地域に須恵器の生産地である陶邑窯跡群が形成された。5世紀後葉から6世紀前葉までの本市域内における窯の造営は、陶器山丘陵およびその北方に連続する高位段丘のみに限定して分布する。発掘調査が行われた窯跡としては山本1号窯（陶器山252号窯）や陶器山15号窯がある。6世紀後半になると陶邑窯跡群における須恵器生産活動はより活発化し、その分布域は東方にひろがる中位段丘にまで拡大し、小規模な段丘崖や開析谷の斜面でも窯が築造されるようになる。TK43型式～TK209型式の須恵器を産出する須恵器窯には、太満池北窯・太満池南窯・狭山池2号窯・狭山池3号窯・池尻新池南窯・今熊1号窯がある。7世紀にはいると本市域内における須恵器窯の数は減少するが、狭山池周辺での生産は継続し、狭山池1号窯・狭山池4号窯・狭山池5号窯・東池尻1号窯・ひとつ池西窯などが確認されている。

7世紀前葉、旧天野川が構成した大きな谷に長さ約300m、高さ6m弱の堤防を築き、旧天野川と三津屋川の流れをせきとめ、ダム式のため池とした狭山池が築造された。狭山池における発掘調査では、中樋・東樋・西樋・木製枠工など、各時代の灌漑用施設が検出された。ここに東樋では狭山池築造時の樋管が検出され、その年輪年代から狭山池の築造年代が7世紀初頭であることが明らかになった。また中樋からは13世紀初頭に僧重源が狭

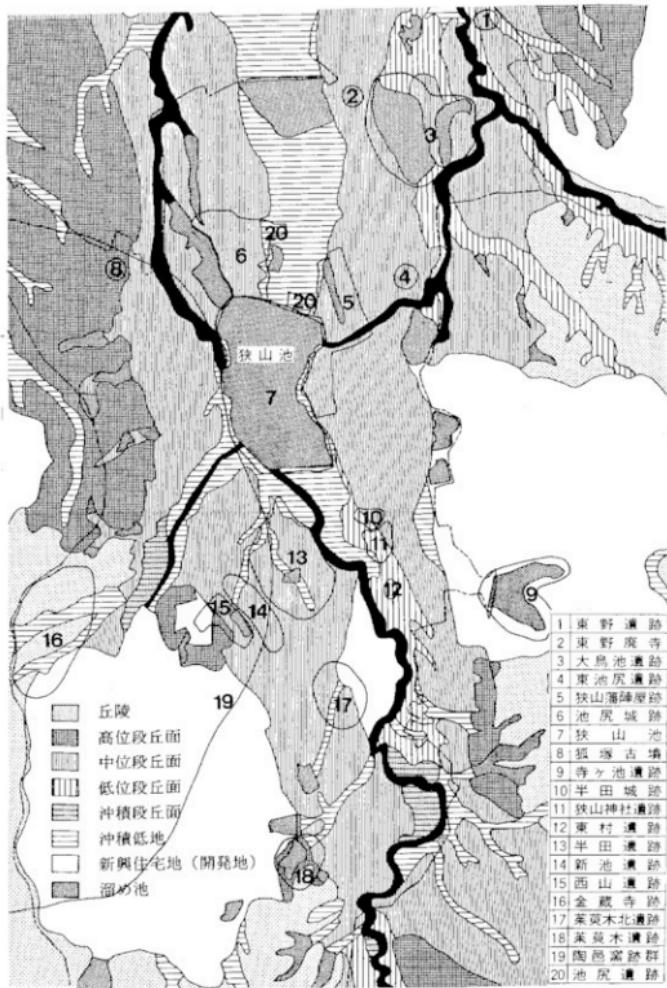


図2 大阪狭山市内の遺跡分布と地形分類

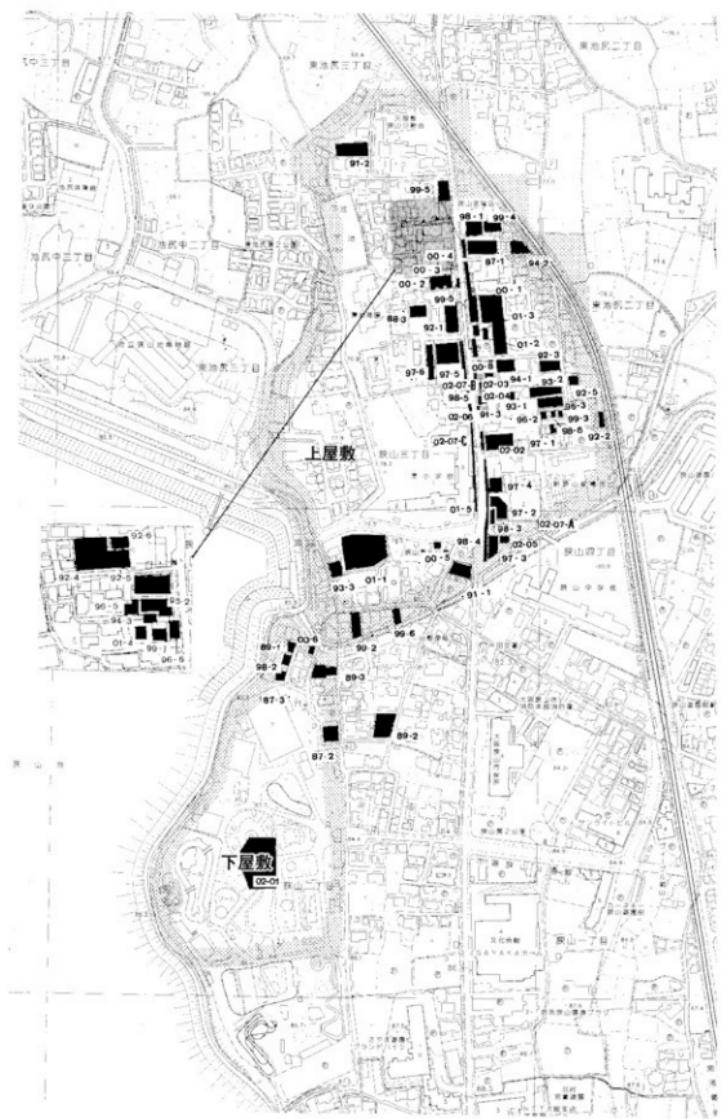


図2 狹山藩陣屋跡における既存の調査箇所 (S=1/5,000)

山池を修築したときの改修碑が出土している。狹山池北側の沖積低地に立地する池尻遺跡では重源の改修とほぼ同時期の屋敷跡が検出されている。西除川（旧天野川）両岸の中位段丘上には、7世紀後葉の東野庵寺、中世城館の池尻城跡、中世集落の庄司庵遺跡、古代～中世の寺院跡である狹山神社遺跡、近世城館の狹山藩陣屋跡など、古代から近世にかけての諸遺跡が成立している。

1・狹山藩陣屋跡

狹山藩陣屋跡は、狹山池の東側に広がる中位段丘上に立地する近世城館跡である。豊臣秀吉によって小田原城を落とされた戦国大名北条氏の末裔が、元和年間にこの地に陣屋を開き、以後明治維新にいたるまでの間、一貫して陣屋が営まれていた。陣屋は北側の上屋敷と南側の下屋敷にわかっているが、領主の居宅である御殿は上屋敷のもっとも北側に設けられ、その周囲には上層の武士の屋敷が建ち、上屋敷の外周部や下屋敷の北部には下層の武士が居住していた。また下屋敷は狹山池に面した景勝の地であり、藩主の別邸も建てられ、広大な馬場が備えられるなど、居宅が密集した上屋敷とはやや趣きを異にした空間であった。

狹山藩陣屋跡では1987年以降、大阪府教育委員会や大阪狭山市教育委員会によって発掘調査が行われてきている。いずれも小規模な発掘調査であるが、これまでの調査件数は約80件にものぼり、その成果をつなぎ合わせることによって陣屋の構造が少しづづ明らかになりつつある。これまでの調査では陣屋が建築された近世初期を遡る遺構・遺物はほとんど検出されてこなかったが、平成15年度に大阪狭山市教育委員会が旧さやま遊園地において実施した発掘調査において7世紀前葉の須恵器窯が発見され狹山池5号窯と命名された。現地は発掘調査以前にはまったく平坦な地形と思われていたが、かつては深い谷がありその斜面を利用して窯が作られていた。陣屋下屋敷の造成にあたっては谷を埋めて平坦地を構築する大規模な造成が行われていたことがわかる。上屋敷についてはほぼ全面にわたって上下2層の遺構面が確認されており、出土遺物からみて上層の遺構面は天明2(1782)年の大火以後の遺構面、下層遺構面はそれ以前の遺構面と考えられる。遺構の性格は多様であるが、多くの遺物が検出されているのは家屋の周囲に掘削されたと思われる土壌である。おそらく火災や建て替えの際にこのような土壌に廃品などが投棄されたものと思われる。出土遺物は日常的な生活用品を中心としながらも、硯、水滴などの文房具の出土が比較的多く、武士の生活の一端をうかがわせる。産地は肥前系や堺産が多く、まれに朝鮮半島製のものがある。

(04-1区)

東池尻3-2550-21に所在する。調査区は狹山藩陣屋跡上屋敷の西北隅にあたる。上屋敷は大半が狹山池の東側に広がる中位段丘面上に立地しているが、04-1区は段丘崖の中間付近にあたっている。個人住宅の建築に先立って発掘調査を実施した。建設予定地に

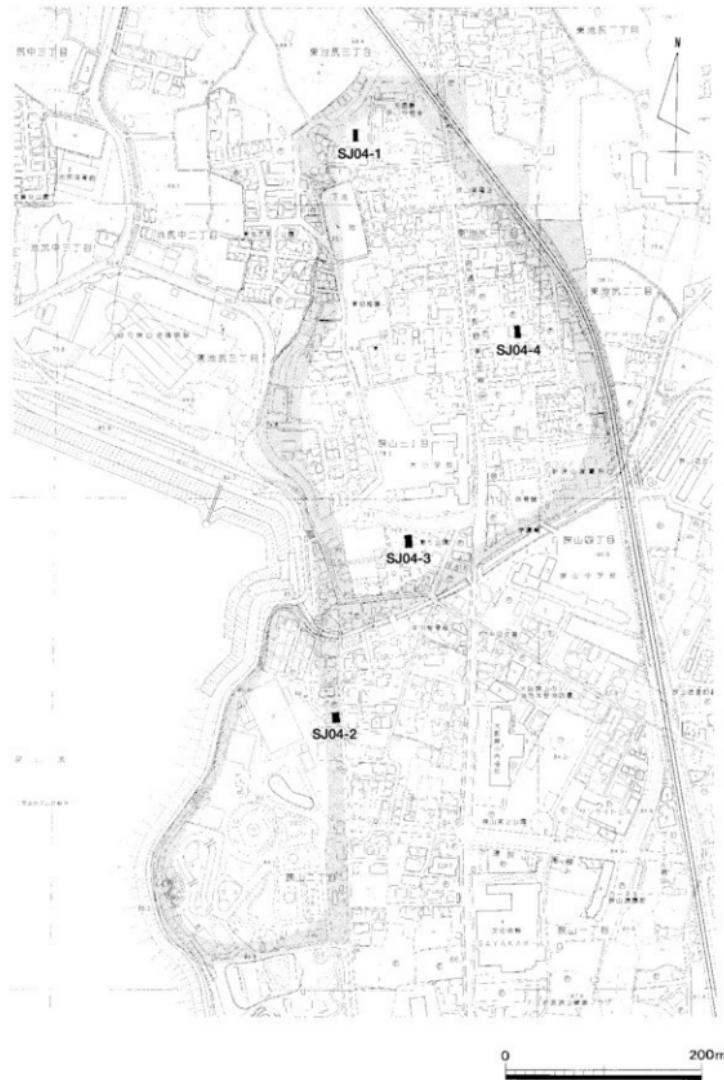


図3 狹山藩陣屋跡調査区位置図 (S=1/5000)

機械でトレーナーを掘削し、遺構の所在を確認したところ、敷地の大半は既設の住宅の基礎などで搅乱されており、調査可能な範囲は南北3.5m、東西3.5mの範囲にとどまった。ただしこの調査区内においても東側の3分の1が搅乱されていた。調査区の西側には東西0.8mの南北方向の土壤2がある。土壤2は調査区の一番西側で深さ55cmであるが、肩から西側に傾斜しており段丘崖の斜面の一部である可能性が高い。この土壤は灰茶色土で埋められ平坦な地形が造成されているが、その埋土の中からは近世の磁器などの遺物が出土しており、造成時期は近世後期と考えられる。土壤1は調査区内で東西1.28m、南北2.6m。さらに南側に延びる可能性がある。真ん中が少し浅くなっているが、北側は最も深い部分で70cm、南側は65cmである。04-1区からの出土遺物のうち実測を行ったのは図10の1から6までである。いずれも近世後期の遺物であり、陣屋の縁辺部にあたるこの調査区付近が造成されて宅地化したものその時期と考えられるだろう。

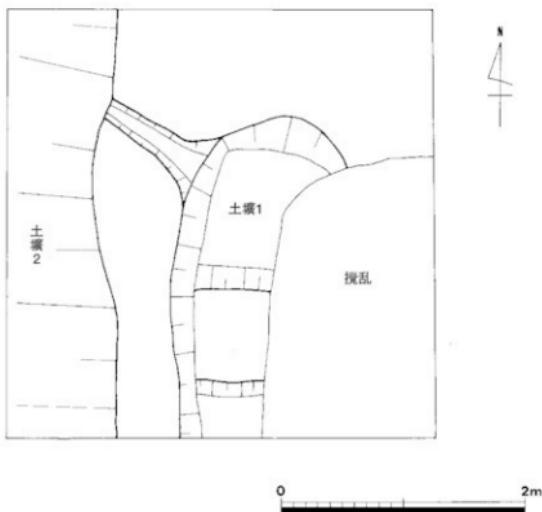


図4 狹山藩陣屋跡04-1区 遺構平面図 (S=1/40)

(04-2区)

調査区は狭山藩陣屋跡下屋敷のほぼ中心に所在する。個人住宅の増築に先立って発掘調査を実施した。建設予定地の規模に合わせて南北9.8m、東西4.0mの調査区を設定し機械で上層を掘削し、人力で下層の掘削、遺構精査を実施した。現状地盤より30cm掘削したところで第1遺構面を検出した。この面の基盤層は明茶色シルトから構成されており、調査区南端に溝、北側でピット3基、土壤1基を検出した。溝は調査区内で幅40cm、長さ4mであるが、さらに東西に伸びる可能性があり、また幅もさらに太いものと思われる。深さは浅い部分で8cm、もっとも深い場所で15cmで、埋土は暗灰色土で水が流れていた形跡はない。3基のピットは深さが8cmから10cmと浅く、配列にも規則性がなく性格は不明である。調査区の北東隅に所在する土壤は調査区内において南北40cm、東西28cmであるが全体の形は不明である。深さは25cmで壁面は赤変しており内部で火を燃やしたものと思われる。第1面の調査を終えて、人力で明茶色シルト層を掘削したところ16cmから30cm下で第2面を検出した。第2面は礫を多く含む茶色シルトより構成されており、表面は固くしまっており造成された面であることは確実と思われたが、この面には明瞭な遺構はみられなかった。そこで調査区の東端においてトレーニチを掘削し、第2面よりさらに深い面の状況、あるいはこの地点における地山面の状況を確認したところ、調査区のもつとも北の部分では第2面より32cm下で茶黄色粘土によって構成される地山面を検出した。ところがこの面はそこから南側に進むとともに深くなっている、地山面は北から南に相当

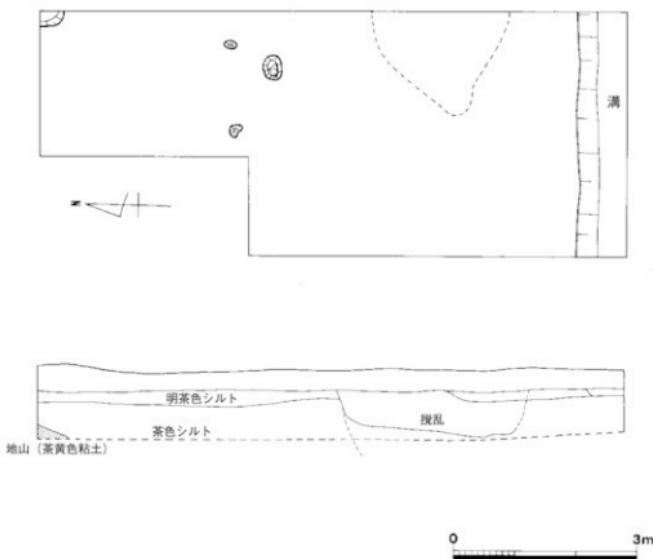


図5 狹山藩陣屋跡04-2区 遺構平面図・断面図 (S=1/80)

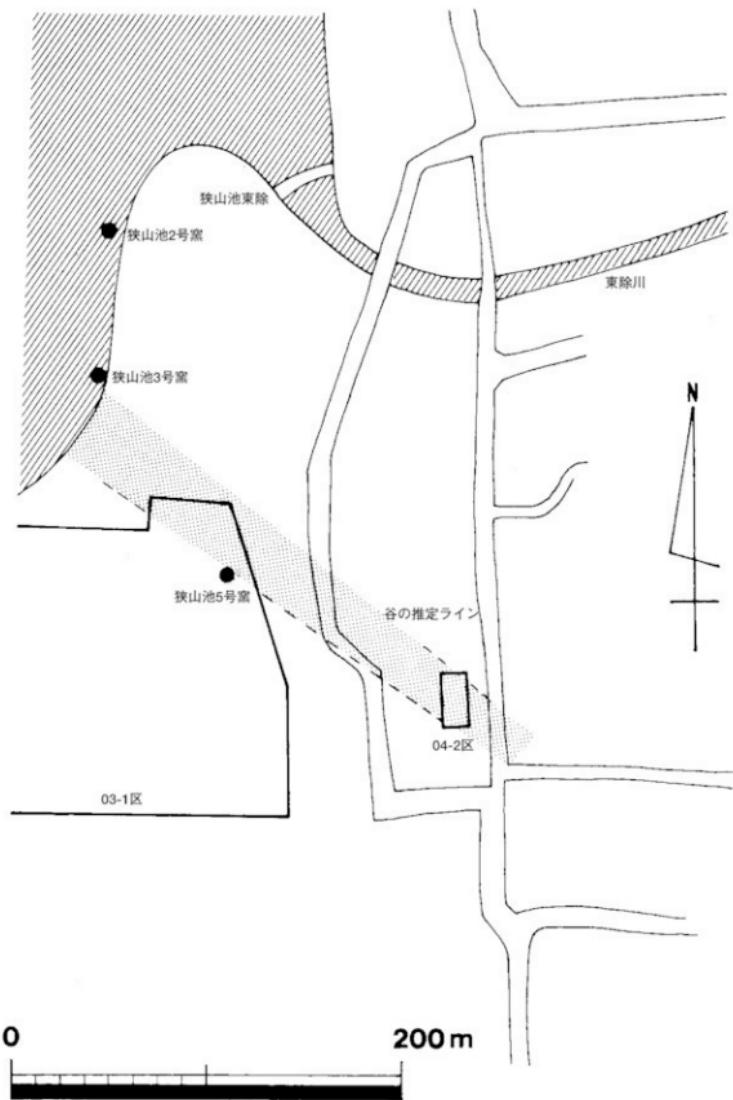


図6 狹山藩陣屋跡04-2区 谷の推定ライン

傾斜していることが明らかになった。建設されるのが基礎の浅い個人住宅であるためそれ以上の掘削はできなかったが、調査区中央部にあった搅乱部においてガラなどを除去して地層を確認したところ第2面から1m程度下がった場所においても地山面は検出できず、この落ち込みは相当深いものと思われた。この落ち込みはこれまでの周辺地域における調査例を照合すると、狹山池から南東方向に入り込んだ谷地形の一部と考えられる。平成15年度に大阪狹山市教育委員会がさやま遊園地跡地で行った発掘調査では南東から北西方向へ走り東除より120m南付近で狹山池に落ちる大きな谷が検出されている。この谷は数次にわたって埋め立てられているが、その埋め立て土を利用して狹山池5号窯という須恵器窯を作っていたことが調査の結果明らかになっているので、この谷の造成の萌芽は狹山池築造の前後にまでさかのぼることとなる。またさやま遊園地があった場所は17世紀の後期に狹山北条氏によって下屋敷の御殿などが作られた場所にあたり、その段階でこの谷は大規模に埋め立てられれば現在みられるような平坦な地形となっている。またこの谷は狹山池の東岸に所在した狹山池3号窯の調査の際にも確認されている。04-2区で検出された地形の落ち込みはこの大きな谷の北側の斜面にあたるものと考えられる。調査の数が少なくこの谷の範囲を明確にすることはできないが、これまでの調査の成果を総合するとおおむね図6のスクリーントーン部分のように谷が走っていたと思われる。狹山池5号窯の調査で確認された谷の埋土と今回の谷の埋土は多くの礫を含んでいる点で類似しており、04-2区の谷が埋められ平坦地が造成された時期は下屋敷が作られた17世紀後期のことと考えられるだろう。

遺物は第1面の溝から火縄銃の砲弾が出土し、第1面を盛り立てる盛土中から須恵器窯の破片が出土している。いずれも細片で時期を特定するにはいたらないが、調査区の付近には狹山池5号窯、3号窯などの須恵器窯があり、これらの遺物が盛土の際に混入したものと思われる。

(04-3区)

狹山3丁目2429-2。狹山藩陣屋跡上屋敷の南端に所在する。上屋敷の中心には南北に大手筋が通り上屋敷の南端に大手門があり、その地点で道は一度西側に屈曲したち狹山池の堤防から南東報告に伸びる街道と合流していた。近世この街道沿いには狹山池の管理を担当する権役人が集住し狹山新宿と呼ばれており、その西側の狹山池沿いには陣屋の小城下町とでもいうべき並松と呼ばれる商業地区が存在した。04-3区はこの並松地区の一部にあたる。

発掘は個人住宅の建設に先立って実施したもので、建築規模にあわせて東西7.6m、南北6.8mの調査区を設定して機械で掘削を開始したが、直前まで西北部には大きな木が植えられており、その根による痛みや抜根のため東西5m、南北3.2mの範囲については搅乱されており調査ができなかった。遺構面は現状地盤から15cm下がった場所で検出された。ただし調査区の西端から2.0mの範囲については明褐色土を厚さ10cmで盛り土しており、その土の中には炭や陶磁器の細片を少量含んでいた。他の部分は茶黄色シルトからなる地山面であった。この面において2列の柱穴列を検出した。東側の列は柱穴4基が一列に並ぶもので、柱穴間の間隔は北から120cm、112cm、152cmであった。西側の列では柱穴2

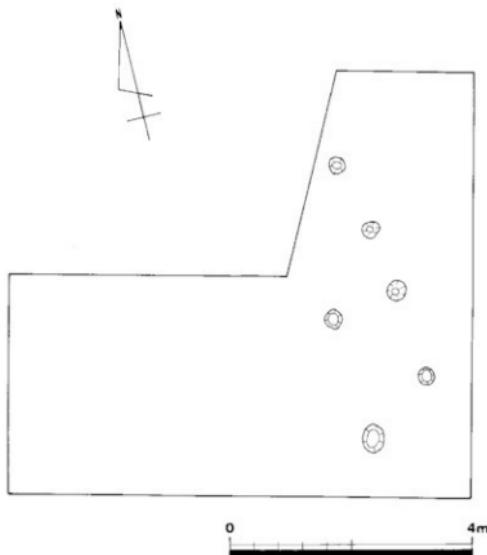


図7 狹山藩陣屋跡04-3区 遺構平面図 (S=1/80)

基が検出されたのみで、その間隔は200cmであった。この2列の方向は南北方向よりも西側に10度振った角度で、これは調査区の南を通る街道にほぼ直行しているので、この柱列は街道に沿って建てられた建設物群の一部を構成していたものであることが推定できる。遺物は少ないが、遺構面の直上で火縄銃の砲弾が検出されている。

(04 - 4 区)

狹山4-2462-2。狹山藩陣屋跡上屋敷の中央部に所在する。個人住宅の建築に伴って発掘調査を実施した。建築規模を考慮し南北9.5m、東西3.7mの調査区を設定した。掘削作業は人力で実施し埋め戻しを機械でおこなった。掘削を実施したところ現状地盤より12cm下がった場所で第1遺構面を検出した。ただしこの面においては既存の建物の基礎による攪乱が著しく調査区の北側6mについては遺構面が乱され調査ができなかった。調査区の南側では土壌1基、ビット2基を検出した。ビット2基はいずれも直径60cm、深さ8cmの浅いビットで、建物に伴う礎石をすえつけるために浅く掘られたものであろう。建物を撤去した時に再利用などのために石は除去されたものと思われる。土壌は調査区内で幅96cm長さ125cm、調査区外西側にさらに伸びる可能性がある。

第1面の調査終了後、さらに掘削を続けたところ12~15cm下で第2遺構面を検出した。精査したところ攪乱が全体の半分程度あったが、調査区の北側と南側では遺構を検出することができた。土壌3は調査区の北端に所在しているが遺構の西側は攪乱されており全体

像を知ることができない。調査区内で南北220cm、東西132cm、北側85cmであった。土甲は幅が狭くなり北端では32cmになっている。土壌3の深さは南側の部分で32cm、北側はさらに深くなっている。土壌3の深さは50cmである。急な角度で掘削された土壌である。土壌4は南北102cm、東西88cmのほぼ円形に近い形状の土壌で深さは45cm。ほぼ垂直に近い角度で掘削されており、底面は水平に仕上げられていた。埋土の上層には瓦片が多く見られた。土壌1から3は調査区の南端に東西に並ぶ土壌でいずれもさらに調査区の南側に伸びる。土壌3は東西135cm、南北は調査区内で102cm。長方形の土壌である。深さは18cmであるが、土壌の東側にはさらに内部が掘られその中に石が二つ並んでおかれていた。石は長さが25~30cmで上面が平らであるため礎石として利用されたものと思われる。その西側に所在する土壌2は東西86cm、南北は調査区内で56cm、深さ28cm。もっとも西の土壌1は調査区内で東西30cm、南北44cm、深さ10cmである。また調査区中ほどに東西方方向の溝2本が検出されている。南側の溝1は最大幅54cm、深さ8cm。溝2は最大幅56cm、深さ8cmともに内部にピット状の掘り下げがありその深さは溝1の場合、溝の底から18cm、同じく溝2では12cmとなっている。

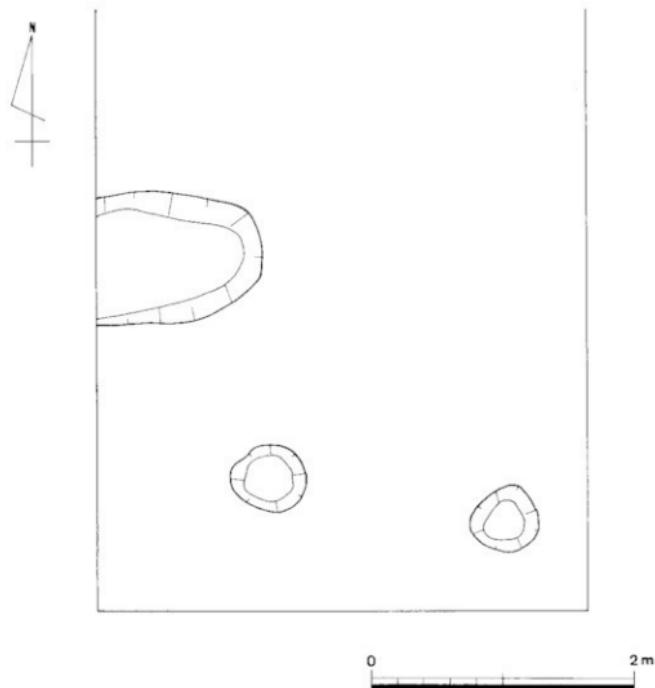


図8 狹山藩陣屋跡04-4区 第1面平面図 (S=1/40)

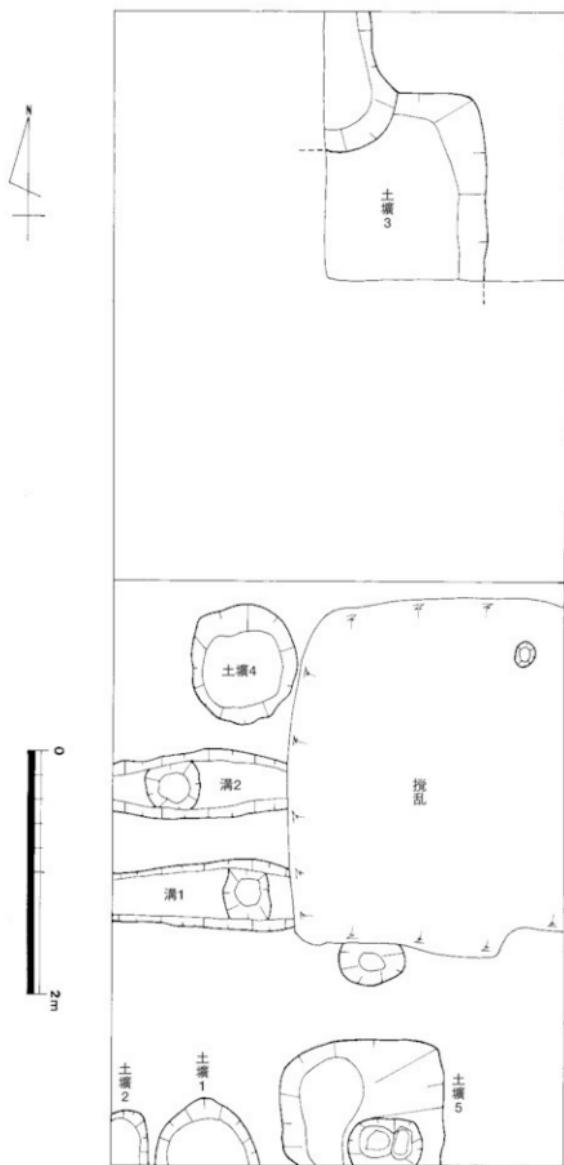


図9 狹山藩陣屋跡04-4区 第2面平面図 (S=1/40)

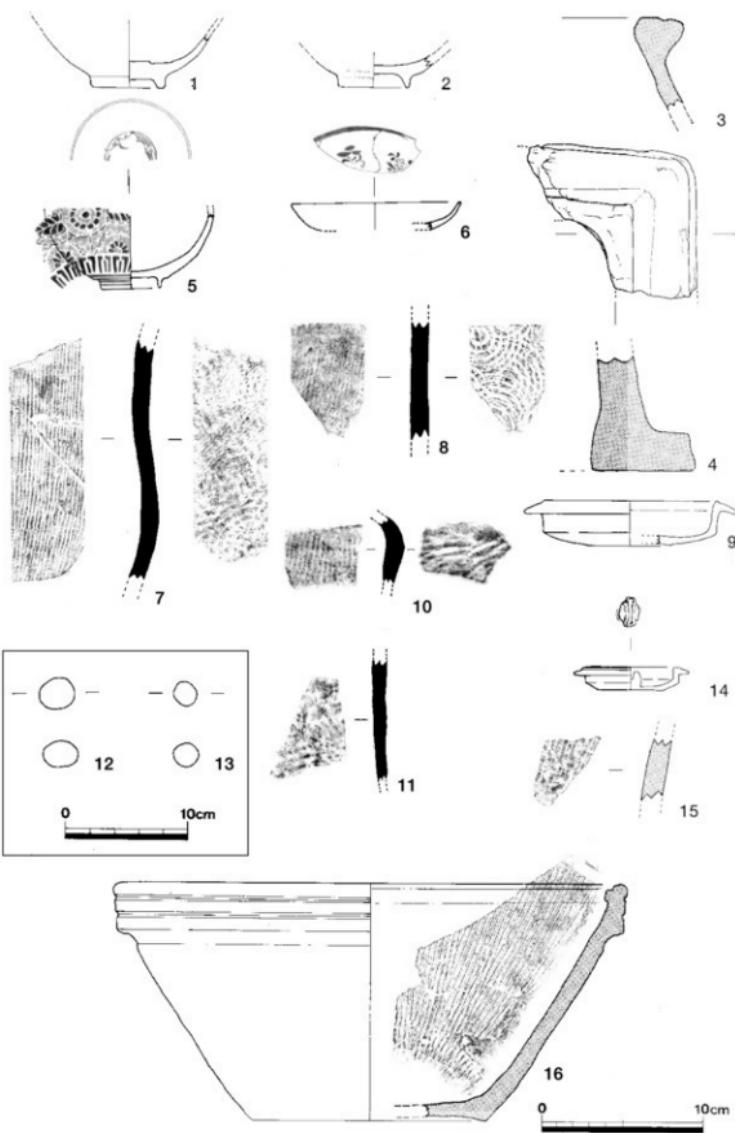


図10 狹山藩陣屋跡出土遺物実測図 (S=1/3)

図面番号	写真番号	調査区	遺構	器種	産地	數値	文様・調整など
1	2-3	04-1区	土壤1	磁器中碗	肥前系	残存高 5.4 cm・ 高台径 4.2 cm	無紋・透明釉
2	2-4	04-1区	土壤1	磁器中碗	肥前系	残存高 1.6 cm・ 高台径 4.3 cm	外面底部近くに 輪線・透明釉
3	2-2	04-1区	土壤1	土器質甕	漆焼	残存高 5.9 cm	
4	2-6	04-1区	2	土器質用途不明	不明	残存高 7.2 cm	
5	2-5	04-1区	2	磁器中碗	肥前系	残存高 4.5 cm・ 高台径 3.8 cm	外面に花紋・ 内面見込に鶴紋
6	2-1	04-1区	2	磁器中皿	肥前系	口径 11.6 cm・ 残存高 1.7 cm	内面見込に花草紋
7	5-2,4	04-2区	2	須恵器甕			
8		04-2区	2	須恵器甕			
9	8-1	04-2区	3	陶器水注蓋	瀬戸美濃系	口径 10.7 cm・ 器高 2.8 cm	外面縁釉・内面露胎
10	5-5,7	04-2区	3	須恵器甕			
11	5-6,8	04-2区	3	須恵器甕			
12	5-9	04-2区	1	砲弾		径 1.5 cm	
13	5-10	04-3区	3	砲弾		径 1.0 cm	
14	8-2	04-4区	2	陶器水注蓋	瀬戸美濃系	口径 5.2 cm・ 受部径 7.2 cm・ 器高 1.45 cm	外面鉄釉・内面露胎
15	8-3	04-4区	2	須恵器甕			
16	8-4	04-5区	2	すり鉢	漆焼	口径 32.0 cm・ 底径 14.6 cm・ 器高 14.8 cm	

表1 狹山藩陣屋跡出土遺物観察表

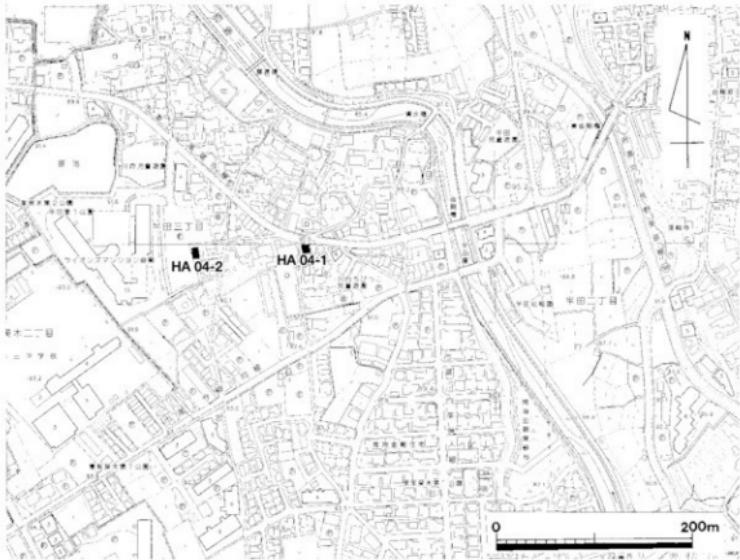


図11 半田遺跡調査区位置図 (S=1/5000)

2. 半田遺跡

半田遺跡は大阪狭山市のはば中央部、西除川左岸の段丘面上に立地する遺跡である。これまでの調査例は多くはないが、80年には大阪府教育委員会によって狭山高校建設に先立つて発掘調査が行われ、木札などが出土している。

(04-1 区)

04-1区は半田遺跡の東端に位置し、このあたりで地形は西除川にむかって大きく傾いている。個人住宅の建設に伴って発掘調査を実施した。まず住宅の規模に合わせて東西方向に長さ 6.8m のトレンチを掘削して断面を観察したところ、この場所での地山と思われる灰茶色の砂礫を多く含む固結した土の層の上面は西側にいくほど高くなり調査区の東端とは 60cm ほどの高度差があることがわかった。これはこの調査区がちょうど段丘面の東端に立地するためであると思われる。ただ調査区の東側では無遺構・無遺物と思われたので、西側において東西 3.9m、南北 3.6m の調査区を設定し、その部分において平面的な調査を実施することとした。掘削・精査の結果、溝 1 条とピット 1 基、土壙 1 基を検出した。溝は幅 23cm、長さ 550cm である。U 字型に回っており、北側はさらに調査区外に伸びる。土壙は東西 70cm、南北は調査区内で 37cm、深さは 15cm。ほぼ方形の土壙である。

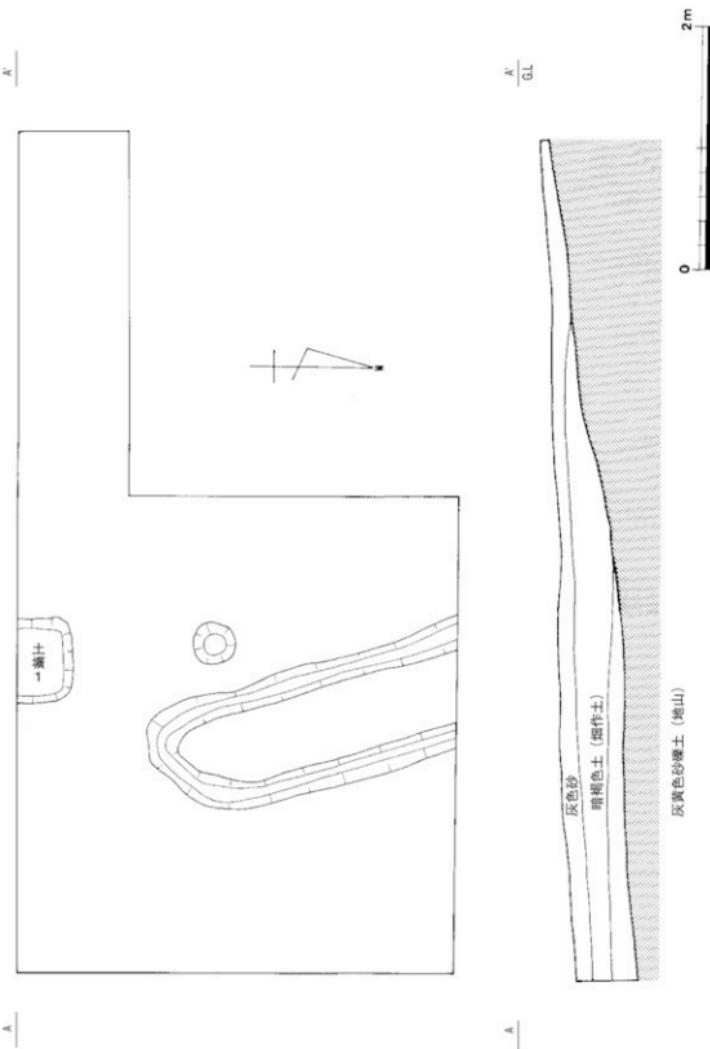


図12 半田遺跡04-1区 遺構平面図・土層断面図 (S=1/40)

まとめ

平成 16 年度は小規模な調査が多かったが、狹山藩陣屋跡では 01 - 1 区においては陣屋の拡張を示す遺構を検出し、また 04 - 2 区では狹山池に流れ込む大きな谷を埋め立てて陣屋を造成する様子を観察することができた。また 04 - 3 区では陣屋の南端における遺構を状況を、また 04 - 4 区では陣屋中央部の比較的小規模な藩士住居の様子を検出した。今後もこのような調査を継続し、市内の遺跡の性格を具体的に明らかにしていきたい。

報告書抄録

書名	大阪狹山市内遺跡群発掘調査報告書 15					
副書名						
シリーズ名	大阪狹山市文化財報告書					
シリーズ番号	32					
編集機関	大阪狹山市教育委員会					
所在地	大阪府大阪狹山市狹山一丁目 2384-1					
発行年月日	西暦 2005 年 3 月 31 日					
ふりがな 所蔵遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査区	調査面積 (m ²)
さやまほんじんやあと 狹山藩陣屋跡	おおさかふおおさかさやましきやま 大阪府大阪狹山市狹山	27231	34 度 30 分 15 秒	135 度 33 分 30 秒	04-1 区 04-2 区 04-3 区 04-4 区	12.2 39.2 35.6 35.1
ほんだいわき 半田遺跡	おおさかふおおさかさやまほんだ 大阪府大阪狹山市半田	27231	34 度 29 分 15 秒	135 度 33 分 22 秒	04-1 区	14.0
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		
狹山藩陣屋跡	城館跡	江戸時代	04-1 区 土壇 04-2 区 柱穴 04-3 区 柱列 04-4 区 土壇・溝	04-1 区 磁器碗 04-2 区 磁器碗・須恵器壺・砲弾 04-3 区 砲弾 04-4 区 陶器蓋・漆焼すり鉢		
半田遺跡	集落跡	中世・近世	04-1 区 溝・土壤			

図 版

図版 1 狹山藩陣屋跡 04-1 区

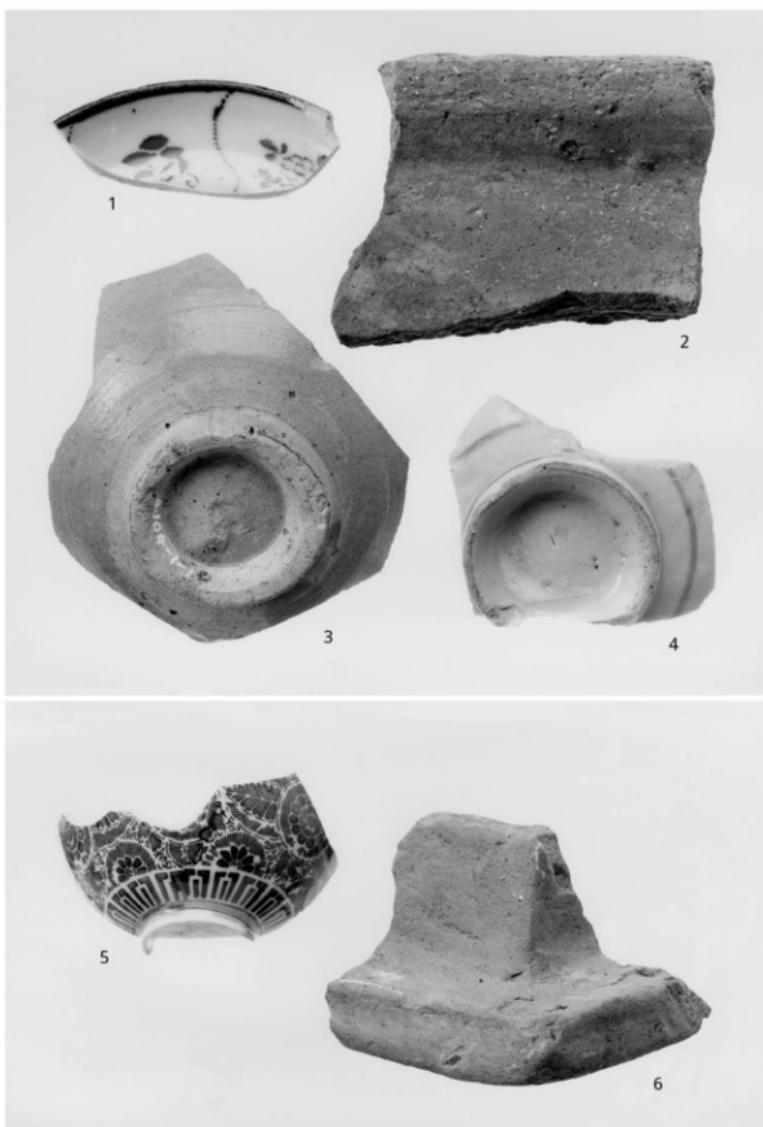


a. 全景



b. 土壙 1、2

図版2 狹山藩陣屋跡04—1区出土遺物





a. 全景（北から）



b. 全景（南から）

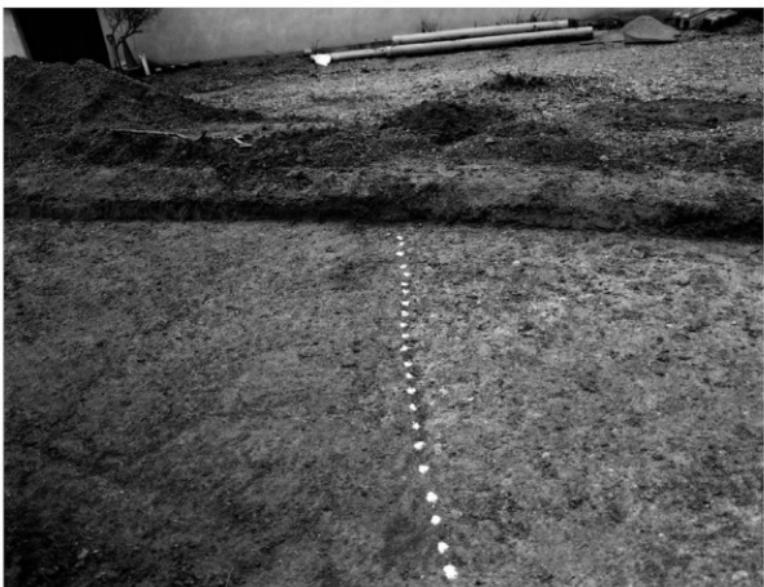


c. 谷の落ち込み

図版4 狹山藩陣屋跡 04—3区

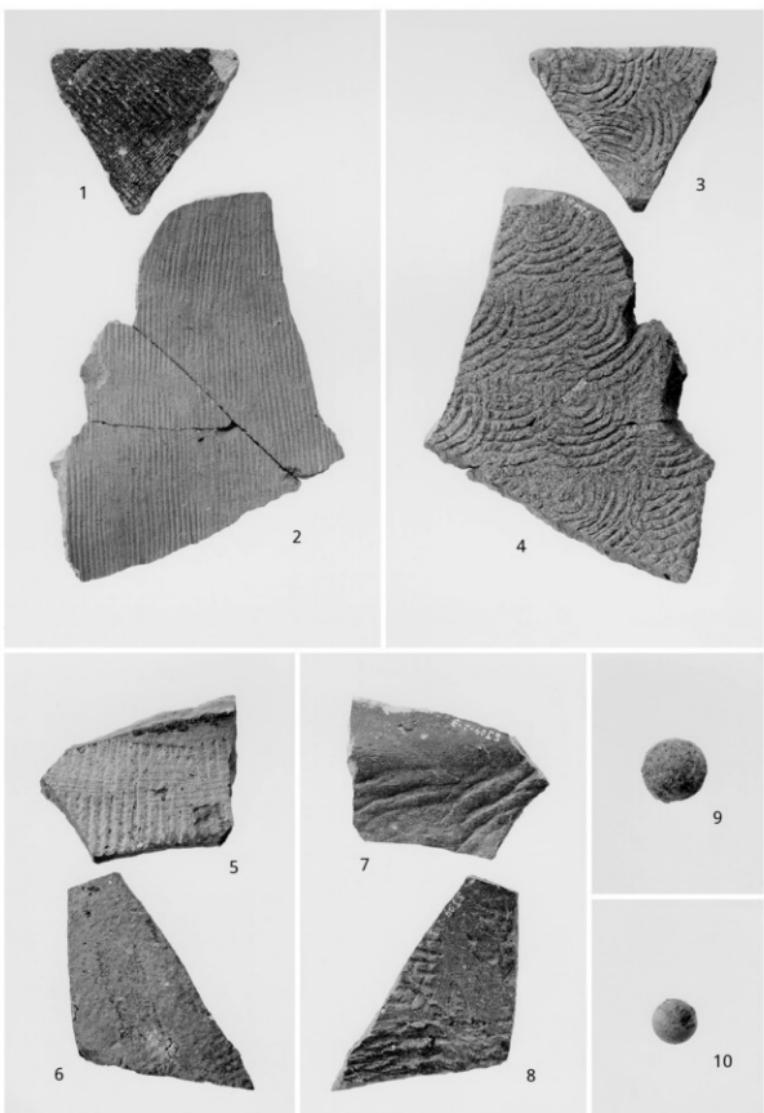


a. 柱列



b. 盛土の境界

図版 5
狭山藩陣屋跡 04-2区・04-3区出土遺物





a. 第1面全景



a. 第2面全景

図版 7 狹山藩陣屋跡 04—4区



a. 土壌 3



b. 土壌 4



c. 第 2 面全景（北から）

圖版 8 狹山藩陣屋跡 04—4 区出土遺物



図版9 狹山藩陣屋跡04—1区



a. 全景



b. 溝・土壤

大阪狭山市文化財報告書32

大阪狭山市内遺跡群 発掘調査概要報告書15

発行日 平成17年（2005年）3月31日

編集・発行 大阪狭山市教育委員会

印 刷 S T 総合広告